

既報のように、6/10~12、広東省増城市で、大規模な暴動が起きた。

その原因の一つに、この地が中国最大のデニム製品(ジーンズなど)の生産基地であり、そこでの雇用の不安定が取り上げられていた。私は長く繊維産業に携わっており、デニムの生産にも手を出したことがある。その経験から、この地の商況や雇用状況に興味湧き、暴動の背景を再度、詳しく調べてみることにした。まず既報を再録しておく。

1. 6/10~12、広東省増城市郊外の新塘鎮で数千人の出稼ぎ労働者が暴動。 暴動レベル3。

・マスコミ情報 : 6/10~12、増城市郊外の新塘鎮の郊外で、四川省出身の出稼ぎ労働者が中心となって、3日間暴動が続いた。原因は6/10午後9時ごろ、新塘鎮大墩村の「農家楽」というスーパーの門前で、四川省出身の王聯梅さん(20歳)が露天を開いていたところ、村の管理者が来て違法露天として取り締まろうとしたので、口論となり王さんが殴られた。ちょうどそのとき王さんは妊娠していたので、近くにいた人たちが管理者の横暴に抗議し騒いだ。政府幹部は王さんをただちに病院に運び、事態を沈静化しようとしたが、四川省出身の出稼ぎ労働者や野次馬など1万人以上が集まり、管理者や警察にレンガやペットボトルを投げつけた。騒動は翌日3時ごろまで続き、暴徒は警察署や出稼ぎ労働者の管理事務所などに投石・放火、数十台の警察車両をひっくり返すなどして



《 破壊され修理中の保安隊事務所 》

騒いだ。一部では銀行のATMが襲われた。翌12日夜にも騒動が起きたので、市政府は武装警察7500人を出動させ、威嚇のため戦車なども投入し、催涙弾を使用するなどして事態の沈静化を図った。出稼ぎ労働者ら25人が拘束され、発砲による死者が出た模様。6/13、新塘鎮には夜間外出禁止令が出された。武装した警察官が10人1組となって、鎮内を巡邏



《 壊された ATM 》

・実情 : 増城市近郊は、中国随一のデニム生産基地であり、無数(1000社超)のモグリ工場(従業員20~30人規模)がそこに蟻集しており、大量の出稼ぎ労働者がそこに集中して働いている。最近、そのデニム工場群の景気が悪く、閉鎖する工場が激増していた。今回の暴動はそれらのデニム工場で働いていた四川省出身の労働者が中心であったという。四川省出身労働者たちには、四川同郷会と呼ばれる非公式の組織があり、今回の騒動はその組織がインターネットで抗議行動を呼びかけたという。当局は事件解決のため、その組織に協力を求めたようである。事件後、増城市公安局は19人の男を公務執行妨害などで逮捕、ネット上で暴動を扇動するデマを流したという理由で男1名を拘束。なお公安当局は6/19、容疑者の摘発に住民の密告の協力を得るため、その見返りとして「5千元から1万円の報奨金と、通報者が出稼ぎ者の場合は“増城市の戸籍”を与える」と発表した。さすがにこの戸籍授与の報奨は行き過ぎだということで、すぐに撤回された。現場付近は6月末でも緊張感がただよっており、監視役の私服警官が多いため、周辺での聞き込みはきわめて困難だった。

2. 7月末の増城市新塘鎮の状況と現場付近の様子

7月末の増城市新塘鎮は、なにごとにもなかったように平静さを取り戻していた。私服警官などの目も気にならなかった。暴徒に襲われ破壊された銀行の ATM はきれい々に修理されていた。ただしそのとき焼き討ちにあった保安隊事務所のビルは、よほど破壊がひどかったとみえ、内部はあまり修理が進んでいなかった。事件後、外地人居住登録が強化されたため、管理事務所は混み合っており、事務所の前の壁には不許可の人の名簿がずらりと貼り出されていた。



増城市共産党委員会と政府は、新塘鎮党委員会の書記と副書記を解任し、副書記が兼任していた鎮長職も更迭した。暴動のきっかけを作った現地の治安当局者と上司の治安職幹部は免職となった。一方、拘束中の暴動参加者11人を起訴した。

3. 増城市のデニム生産基地の特徴

増城市は中国最大のデニム(ジーンズ)生産基地である。しかしその生産基地は、外需やブランド品の工場が操業している場所と内需の工場群の場所がはっきりと別れている。市内に近い場所には外需型大型工場が林立しており、そこは中国の他の工場団地のたたずまいと変わりなく、比較的奇麗であり、雰囲気も落ち着いている。

その場所から車で10分ほど走ったところに、内需製品の工場が蟻集している。ここでは道路の両側に、小さな店舗風

の工場？が無数に立ち並んでいる。建物は2～3階建てが多く、ジーンズの縫製は2階から上で行い、中間の洗い工程は大手の別工場に外注し、最終工程は1階の土間で行うという奇妙な形態で操業されている。ほとんどの店舗風工場の1階の作業現場は道路にはみ出しており、労働者は炎天下で糸切り、アイロン、梱包などの手作業を行っていた。ただし事務所は中2階になっており、経営者はクーラー付きの部屋で、階下の仕事を監督していた。このような店舗風工場が増城市新塘镇に1000社以上あるという。これらの店舗風工場の経営者の多くは、10年ほど前までは外需製品の縫製工場に勤めていた人が多く、そこで技術や営業を覚え、その後湖南、湖北、四川省出身者が多く、鎮内には武漢通りと称されている場所があり、私の合弁工場がある黄石市出身者も多いという。そこでひよつとすると私の顔見知りがいるかもしれないと思い、それらを訪ね近況を聞いてみた。彼らは、「この店舗風工場は資金が少なくて始められる。建物は借り物であり、設備も中古品で安く、大型で高額設備が必要な部分は外注で回す。この地にはそのような分業体制ができあがっている。素材も格安のものが全国から流れて来ている。午前中に市内の卸売り市場で受注して、翌々日には製品を納品し現金をもらう。昨年までは結構儲かった」と、楽しそうに話してくれた。しかし今年上半期の内需市場はきわめて悪く、仕事が昨年対比半減しているという。なお、ジーンズ1本の加工賃は8～10元。

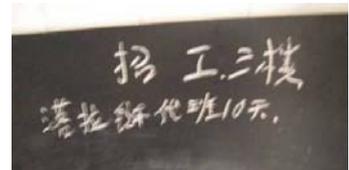


《 店舗風工場 》



《 市内の卸売り市場 》

↓ 《 黒板求人 》



4. 増城市の特殊な営業・雇用形態：黒板求人

店舗風工場を見て回っている間に、これらに面白い共通現象があることに気が付いた。ほとんどの店舗風工場の前には、黒板が掲げられており、そこには白墨で、その工場の、その日の求人内容が書き込んであったからである。私は中国全土の求人広告をウォッチしてきたが、黒板に白墨書きのものは始めて見た。中には期間指定で募集しているものもあった。つまりこの地域では、日雇いが恒常化しており、経営者は受注してから必要な労働者を黒板に書き込み募集し、労働者は毎日、それらの黒板を見て歩き、条件のもっともよい店舗風工場を選び、日雇いで働く。この地ではこのような雇用システムが、労使双方の利益に合致し、大々的に行われているのである。

これらの店舗風工場は、工場としての営業許可を取得していない。なぜならそれらは店舗であるからである。したがって工場としては当然のことながらもぐりである。どの店舗にも正社員は1～2名しかいない。しかし実際には少ないところでも10人、多いところでは50人ほどの労働者が働いている。そこで働いている労働者たちは、どこの会社にも所属しておらず、いわば幽霊労働者である。会社はもちろん社会保険には加入していないし、税金なども店舗に該当する分しか払っていない。労働者は社会保険など眼中になく、とにかく高い日給のところを探し求めて流れ歩く。したがってこの地の労働者の月給は結構高く、技術のまったくない人でも2000元を下回ることはなく、5000元以上を手にするものがあるという。これが増城市の店舗風工場のからくりと現状である。

労働者はこの地に流れ込み、毎日、12時間以上働き、窓ガラスもないタコ部屋のようなところで寝起きして、手っ取り早く金を稼ぎ、できるだけ早く店舗風工場のオーナーになり、中2階のクーラー付きの部屋に住むことを夢見てきた。そして彼らの中の一握りの人がそれを達成してきた。しかしこのシステムが機能するのは受注が順調なときのみであった。今年の前半は肝心の内需の仕事が極端に少なかったという。たしかに7月末でも、表通りの店舗風工場は忙しそうだったが、一歩工場街に入ると、1/3ほどがシャッターを下ろし閉店休業状態であった。暴動現場はそのような場所の中心にあった。暴動は一攫千金を夢見て故郷を出てきた出稼ぎ労働者、しかも負け組の夢破れた結果の行動であったとも考えられる。



《 労働者たちの宿舎 》

以上